

ラフカディオ・ハーン『中国怪談集』研究

郭, 瀟穎

<https://hdl.handle.net/2324/7329550>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名	郭 瀟穎				
論 文 名	ラフカディオ・ハーン『中国怪談集』研究				
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	秋吉 収	
	副 査	九州大学	教授	東 英寿	
	副 査	九州大学	教授	波潟 剛	
	副 査	九州大学	講師	松枝 佳奈	
	副 査	熊本大学	教授	西槇 偉	

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn 小泉八雲、1850-1904)の *Some Chinese Ghosts* (Roberts Brothers, 1887, 日本語訳：『中国怪談集』) に収める六篇の物語をその原典たる中国古典文学と比較検討することによって、ハーン文学における中国文学の受容と変容、その経路について明らかにし、これまであまり注目されてこなかったハーンの中国認識を改めて詳細に考察検討することで、ハーンと中国・アジアの関係について新たな知見を提示したものである。本論は以下の如く、「序論」、十章からなる「本論」と「結論」から構成される。

第一章では、ハーンと中国の関係を精査する。彼の中国関連蔵書等を改めて確認すると、ハーンは従来考えられていたよりもずっと早い時期から、哲学、思想、文学、歴史、宗教といった幅広い分野で中国に強い関心を有していたことが明らかになる。19 世紀当時のフランスは中国研究において重要な拠点であったが、ハーンはそうした中国原典のフランス語翻訳も数多く収集するなど、豊富な素材を意識的に選択利用して『中国怪談集』の六篇の物語を書き継いでいったことを明らかにしている。

第二章では、六篇の収録作品から「大鐘の霊」を取り上げる。娘可愛が父親を救うために自ら竈に身を投げ犠牲になる話である。ハーンは「解題」でその原典は中国清代『百孝図説』だと明記しており、先行研究でもクロード・フィリベール・ダブリ・ド・ティエルサンによってフランス語に翻訳された俞葆真の『百孝図説』「投爐成金」がその原典であるとされてきた。だが本論文はハーンが実際に依拠したのが、清国税関の公務員であったジョージ・カーター・ステント (1833-1884) の書いた「大鐘の伝説」であることを発見した。そこには、中国における儒教徳目の「孝」に対するハーンの視線が横たわっている。

第三章では、「織女の伝説」の伝播経路を考察する。その原典たる道家の書『太上感應篇』の版本問題については従来定説がないが、ハーンが参照したのはフランスの中国学者ジュリアンが翻訳した仏語版であることを初めて明らかにした。また続く第四章では、ハーンの再話作品「織女の伝説」と原典との異同の分析を通して、「孝道」に対するハーンの理解の一端を解明し、あわせてハーンにおける儒教道徳を透過した中国像の構築について考察を行った。

第五章では「瓷神譚」を分析する。景德鎮の陶磁はヨーロッパでも人気を博すが、中国の民間伝承「風火仙」童賓の物語もフランス人宣教師、ダントルコールを通じて欧米に伝わり、ハーンの怪談作品「瓷神譚」に結実した。ハーンはアメリカ時代から既に儒教の「忠」を認識しており、職人と窯の神との会話を通して芸術への献身の精神を称賛したが、そこにはハーン自身の芸術観も表現

されていたことを、本論文は綿密に分析し、提示した。

第六章では「孟沂の話」を取り上げる。この作品でハーンは中国独特の文化や物語を紹介することで、遠く離れた西洋の読者に異国情緒を伝えている。また「俗」から「聖」へ、「女霊」から「女神」へと変更された主人公の形象は、19世紀アメリカ文学の潮流と切り離せない関係を有していたことを本論文は実証的に考察した。東西文学双方の要素を吸収した文学者の道へ歩もうとしたハーンの姿が「孟沂の話」から窺える。

第七章は「茶の木縁起」を手掛かりにし、ハーンと仏教ひいては宗教思想との関連について考察する。ハーンは煩悩の象徴としての女性、欲望を克服する僧侶の描写を介して、仏教に対する認識の一端を示している。興味深いのは、そこには東洋の仏教のみではなくカトリックの教義も導入され融合されていると見られることだ。また第八章は「顔真卿の帰還」を取り上げ、その中国語原典からフランス語、英語への変遷を辿る。ハーンは「儒教」倫理に支えられた「忠」の思想を中核として改変・再話を行っていることが明らかになった。

第九章では、一度も中国を訪れたことのないハーンと中国の関係について、従来あまり注目されなかった一連の中国論説を再度読み解き考察する。実は、当時の西洋における一般観念と同様、ハーンもまた中国人を遅れた人種と見なすと同時に、安価な労働力を大量に輸出するという経済的な脅威を強調していた。ここからハーンの西洋中心的な思考様式を改めて指摘することができる。しかし西洋の学者が「異教徒」たる中国人を歪曲して攻撃し、宣教師の派遣によって中国人の宗教信仰さえも支配することに何ら疑問を持たなかったのに対し、ハーンは中国の宗教・信仰を正確に捉えて紹介する姿勢を貫いた。そこにハーンの独自性・東洋理解の真実が垣間見られることを、本論文は明らかにした。

また論文の終章で、ハーンによる日中双方の“怪談”についてその共通点と相違点を改めて詳細に分析し、両者に描かれた怪奇性と妖気趣味、動植物伝説への関心等の要素を摘出したことも、顕著な意義として特筆される。

以上のように本論文は、従来の研究においてほとんど看過されてきた『中国怪談集』を初めて本格的に調査分析を行うことで、多くの事実を明らかにした。日本近代文学、また比較文学の観点から従来のハーン研究にも裨益するところが大きい研究だと判断される。よって、本論文は博士（学術）の学位に値すると認められる。